

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

## A Preliminary Analysis of Temporal Changes of Language Expressions in the Minutes of the National Diet of Japan

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-03-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山口, 昌也 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/00001532">https://doi.org/10.15084/00001532</a>

# 国会会議録における言語表現の時間的変化の予備的分析

山口昌也 (国立国語研究所音声言語領域) †

## A Preliminary Analysis of Temporal Changes of Language Expressions in the Minutes of the National Diet of Japan

Masaya YAMAGUCHI (Spoken Language Division, NINJAL)

### 要旨

本発表では、国会会議録(衆議院・予算委員会, 1947-2012)を対象に言語表現の時間的変化の予備的な分析を行う。本研究の最終的な目標は、時間的変化のモデルを構築することであるが、今回はモデルの構築に先立ち、モデルの雛形を構築する。まず、第1回～48回(1947/1965)、および、第145回～182回(1999/2012)の2区間における文字5gramの比較に基づいて、頻度変化の大きな表現を抽出したのちに、全期間(1947～2012)の経年変化を計測した。さらに、会議録作成時に行われる整文の影響を考慮した上で、抽出した表現の特徴を分析し、(a)会議特有の表現が減少傾向にあること、(b)改まった場を想定しない表現が増加傾向にあることを示した。さらに、この分析結果に基づいて、国会の議論における発話状況を考慮した時間的変化モデルの雛形を提案した。

### 1 はじめに

本稿では、国会会議録を対象に、言語表現の時間的変化の予備的な分析を行う。ここでは、特定の語の変化というよりも、複数の語からなる「言語表現」の時間的な変化を扱う。最終的な目標としては、時間的変化のモデル化を目指すものであるが、本稿では、その準備段階として、時間的変化の大きい表現を抽出し、その分析に基づいて、モデルの雛形を作成する。

国会会議録は、戦後から現在までの話し言葉を記録した貴重な資料として、これまでに、多くの言語研究で利用されている(松田, 2008a; 服部, 2014)。経年変化の研究を行う上で国会会議録が優れている点は、対象とする議題や社会的環境の変化があるにしても、国会という単一の場において、規定された役割を持った話者が、規定された手順にしたがって行った議論を、長期間に渡って記録している点である。これは、本研究が研究対象としている理由でもある。

国会会議録を利用した経年変化の研究としては、外来語(茂木, 2008)、「ら抜き言葉」(松田, 2008b)、「が/の」交替(南部, 2008)、「～シテイル/シテオル」(服部, 2009)など多岐に渡る。しかし、これまでに行われてきた研究は、多くの場合、特定の言語要素に対して、言語内の要因に基づいた分析がなされている。それに対して、本研究では、分析対象をあらかじめ特定の言語要素に限定するのではなく、実際に変化している表現をデータに基づいて抽出し、その結果に基づいて、経年変化のモデルを構築することを目指している。また、モデル構築の際には、発話の状況など、従来十分用いられてこなかった、言語外の要因についても考慮することにする。

### 2 分析方法

#### 2.1 対象とする資料

本研究では、第1回1号～第182回2号(1947～2012年)の衆議院予算委員会を対象とする。予算委員会を選択したのは、第1回から継続的に存在する常任委員会であり、また、本会議などと異なり、委員同士の実質的な対話が存在するためである。

†<http://www2.ninjal.ac.jp/masaya>

使用した資料は、全文検索システム『ひまわり』用に筆者が公開している『国会会議録』パッケージ<sup>1</sup>である。『国会会議録』パッケージは、『国会会議録検索システム』<sup>2</sup>に収録されている国会会議録のうち、衆議院・参議院の本会議・予算委員会の会議録(第1回1号～第182回2号、HTML版)をダウンロードし、『ひまわり』用にインポートしたデータである。インポート時には、会議情報(回・号、開催年月日)、発言情報(発言者氏名、肩書、生年)、討議部分・非討議部分を区別するための情報をマークアップしている。なお、パッケージ中のデータは、『ひまわり』での検索に適した形式のXMLで記述されているが、テキストファイルであり、本文自体への修正は基本的に行っていないため、『ひまわり』以外のツールでの利用も可能である。

本研究では、この資料のうち、衆議院予算委員会の討議部分のみ<sup>3</sup>を分析対象とする。会議数は2034、討議部分の総文字数は約1.5億字である。検索時は、当該部分の発言者の氏名、生年、肩書を取得することができる。

## 2.2 予算委員会における発話状況

分析に先立って、予算委員会がどのように進められるかを説明する。というのも、予算委員会の各段階において、発言者の役割や発言の目的といった、発話状況が緩やかに設定できるからである。発話状況の設定は、時間的変化モデルの構築において、重要な役割を果たすと考えられる。

衆議院・参議院サイトのコンテンツ(衆議院, 2014b; 参議院, 2014a)を元に、予算委員会の流れをまとめると次のようになる。各段階には、発生する発話状況を模式化して示す。なお、内閣総理大臣、国務大臣、政務次官など政府側の発言者は、「政府関係者」としている。

- (1) 趣旨説明： 議案を担当大臣が説明する。

政府関係者  $\xrightarrow{\text{説明}}$  出席者 (発話状況 1)

- (2) 質疑： 各委員が、国務大臣その他の政府関係者などに一問一答の形式で質疑する。必要に応じて、専門家や事案の当事者(委員外出席者)から、意見を聞くことができる。

委員  $\xrightarrow{\text{質問}}$  政府関係者 (発話状況 2)

政府関係者  $\xrightarrow{\text{回答}}$  委員 (発話状況 3)

委員外出席者  $\xrightarrow{\text{説明}}$  出席者 (発話状況 4)

- (3) 討論： 委員同士が賛成・反対の立場を明らかにして、議案に対する意見を述べる。討論が行われる場合は、反対、賛成の順に行い、反対や賛成すべき理由を具体的に述べる。

委員  $\xrightarrow{\text{意見表明}}$  出席者 (発話状況 5)

- (4) 採決

## 2.3 手順

分析は、以下の手順で行う。

- (1) 分析対象の言語表現の候補を得るために、調査対象期間の先頭と末尾の2期間での出現頻度の変化を調べ、変化の大きい言語表現、変化の少ない言語表現を抽出する。

<sup>1</sup><http://www2.ninjal.ac.jp/lrc> の全文検索システム『ひまわり』のページで公開している。

<sup>2</sup>[http://kokkai.ndl.go.jp/KENSAKU/swk\\_startup.html](http://kokkai.ndl.go.jp/KENSAKU/swk_startup.html)

<sup>3</sup>会議録には、討議部分の前後に、会議の参加者一覧などの情報が含まれている。討議部分の厳密な定義については、『国会会議録』パッケージのページを参照されたい。

- (2) 抽出された言語表現に対して、調査対象全期間の経年変化を調べ、特殊な変化をする表現がないか、確認する。これは、会議録を作成する過程で行われる「整文」(松田ほか, 2008) など、特殊な要因による変化を把握し、必要に応じて、分析対象から除外するためである。
- (3) (2) で決定した対象表現の経年変化の特徴を分析し、経年変化のモデルの雛形を作成する。なお、検証は本研究では行わない。

### 3 分析対象表現

#### 3.1 分析対象の言語表現候補の抽出

分析対象の言語表現の候補を抽出する基準としては、対象資料の先頭、末尾の2期間(第1回~48回/1947~1965, 第145回~182回/1999-2012)について、文字5gramを求め、その出現頻度の変化率を用いる。文字列*s*に対する変化率*r*は、次のように定義する。

$$r = (f_{tail} - f_{head}) / \max(f_{head}, f_{tail}) \times 100$$

なお、*r*は、 $-100 \leq r \leq 100$ の値を取り、 $r > 0$ の場合は2期間の間で増加、 $r < 0$ の場合は減少していることを表す。 $f_{head}$ 、 $f_{tail}$ は、それぞれ、期間の前部・後部における20万字あたりの出現頻度である。

表1, 2, 3は、それぞれ、減少分の比率が大きい文字列( $-100 \leq r \leq -70$ )、変動の少ない文字列( $-10 \leq r \leq 10$ )、増加分の比率が大きい文字列( $70 \leq r \leq 100$ )である。

ただし、低頻度の文字列は変動が大きくなる場合があるため、10万字あたりの出現頻度が20以上の文字列に限定している。また、スペースの関係上、「おるのであ」と「ておるので」のように、重複を含む文字列は、基本的に片方しか表に挙げていない。

表 1: 減少分比率が高い文字列

文字列	$f_{head}$	$f_{tail}$	$r$
になつてお(×)	22.9	0.00	-100
われわれは(×)	21.8	0.02	-99.9
おるのであ	53.4	0.2	-99.6
、そうして(×)	20.3	0.3	-98.5
ればならぬ	41.7	1.0	-97.6
おるとい	20.3	3.2	-84.4
いたしたい	25.5	4.0	-84.4
のでござい	43.0	8.6	-80.0
いうものは	42.2	9.0	-78.7
おきまして	59.9	13.4	-77.7
思うのです(×)	23.1	5.5	-76.2
しましては	26.1	7.0	-73.3
であります	472.9	126.9	-73.2
。こういう	26.5	7.7	-70.1

表 2: 変動の少ない文字列

文字列	$f_{head}$	$f_{tail}$	$r$
思いませんが	25.3	27.7	8.58
ありません	29.0	31.8	8.58
ございます	183.6	198.7	7.63
るとい	81.9	86.4	5.19
ではないか	34.7	36.6	5.14
いまして、	35.7	37.3	4.38
については	52.7	54.5	3.16
ております	213.8	212.4	-0.69
たしました	24.5	24.1	-1.52
わけであり	49.8	45.6	-8.36

表 3: 増加分比率が高い文字列

文字列	$f_{head}$	$f_{tail}$	$r$	政府率
んですけれ	0.24	24.8	99.0	0.17
ふうに思い	0.24	21.4	98.8	0.56
思うんです(×)	0.42	33.4	98.7	-
いるんです	0.67	39.8	98.3	0.10
ないんです	0.53	28.5	98.1	0.13
させていた	1.36	42.9	96.8	0.19
ています。	1.31	34.2	96.2	0.36
。そして、(×)	0.94	22.9	95.9	-
そういった	1.69	22.9	92.6	1.23
てください	1.88	25.3	92.6	0.09
ころでござ	1.86	22.9	91.9	8.44
でしょうか	2.89	31.3	90.8	0.07
うに思いま	2.59	25.8	90.0	0.76
思っており	8.57	61.5	86.1	3.13
いるわけで	7.06	50.6	86.1	0.48
いました。	3.87	24.4	84.1	0.54
おっしゃっ	4.25	25.2	83.1	0.31
それから、	3.84	22.5	83.0	0.96
というのは	17.6	88.3	80.1	0.37
ないですか	5.39	23.8	77.3	0.04
されている	6.31	27.5	77.1	0.30
言っている	4.65	20.1	76.8	0.15
なっている	6.67	28.3	76.5	0.24
ですから、	14.0	53.7	74.0	0.41

### 3.2 経年変化の確認と分析対象の絞込み

本節では、前節で求めた言語表現候補に対して、全期間での出現分布を調べ、特殊な変化が発生していないか、確認する。区間幅1年のヒストグラムで出現分布を表示したところ、15候補に特殊な変化の疑いが認められた。推定される要因は、すべて表記方法に起因するものだった。要因別に分類した結果を次に示す。

- |               |  |
|---------------|--|
| (a) 促音・拗音の表記  | 「になつてお」「そういった」「でしょうか」「思っており」「おっしゃった」<br>「言っている」「なっている」 |
| (b) ウ列の長音の有無  | 「、そうして」「。そして、」   |
| (c) 漢字・ひらがな表記 | 「われわれは(我々は)」   |
| (d) 「の」と「ん」   | 「思うのです」「んですけれ」「思うんです」「いるんです」                           |
| (e) 不明        | 「てください」  |

まず、(a)のうち、促音の表記基準の変更は、1955年に発生しており、出現頻度にはっきりした断絶が見られる。具体的には、大きい「つ」を含む「になつてお」は1955年から使用されておらず、「になつてお」が出現するようになる(図1)。反対に、小さい「つ」を含む候補、例えば、「そういった」では、1955年以前はほとんど出現しない(図2)。このような特殊な変化は、拗音を含む候補や(c)の「われわれは」(図3)、原因は不明だが一定区間(1956~1962年)の断絶が存在する(e)の「てください」(図4)でも発生している。これらの候補のうち、1955年前後の急激な変化を持つ「になつてお」と、(「我々」と)混合後の $|r|$ が0.7以下になる「われわれは」は候補から除外する。それ以外の候補は、(混合後も)依然として $|r|$ は0.7以上であり、増加・減少傾向が明らかなので候補のままとする。

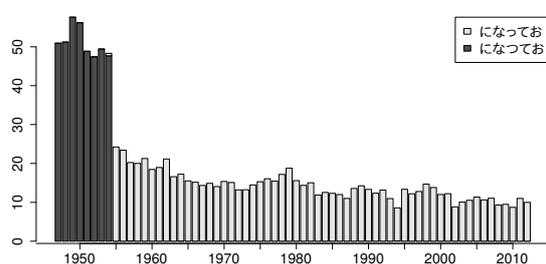


図1: 「になつてお」

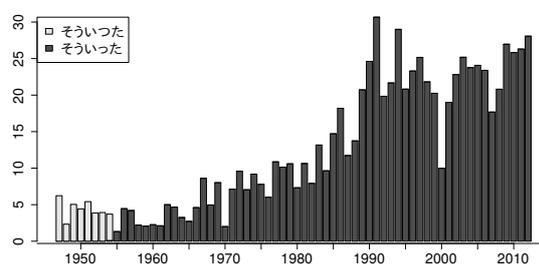


図2: 「そういった」

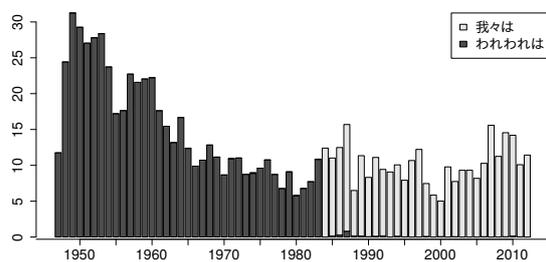


図3: 「われわれは」

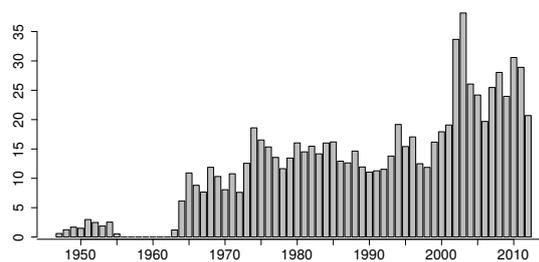


図4: 「てください」

次に、(b)と(d)の候補について見てみる。これらの候補は、(a)と同様に、組になる表現が存在する(例:「、そうして」「。そして、」)。しかし、(a)と異なるのは、組になる表現とまったく同一の言語表現とは言えないため、混合分布で判断することはできないところである。また、聞き分けが難しいことも想像され、正確に区別されているのか、という疑いも捨てきれない。そこで、個別の分布と混合分布の両方を勘案して判断することにする。

その結果、「んですけれ」「いるんです」は、混合前後いずれでも増加傾向を示しているのので、分析候補からは外さないことにした(図5は「んですけれ」)。一方、「、そして」「。そして、」(図6)、「思うのです」「思うんです」(図7)については、混合前後で分布の傾向が大きく変わるため、分析候補から外す。

なお、「思うんです」は、「思うのです」との混合分布でも(分布の形は大きく異なるが)増加傾向を示すので、増加傾向と判断することも可能であるが、2000年前後での「思うのです」の急激な減少は整文の影響が疑われるので、今回は除外した。

以上をまとめると、前述の6文字列を除く、合計42文字列を分析対象とする。除外した文字列は、表1、3に(×)を付加する。また、確認のため、分析対象の文字列の出現分布を、減少分比率が高い文字列(表1)、変動の少ない文字列(表2)、増加分比率が高い文字列(表3)から1例ずつ示しておく(図8、9、10)。

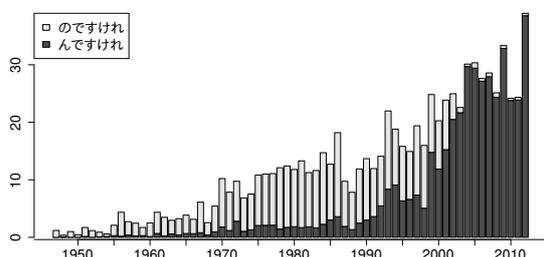


図5: 「んですけれ」

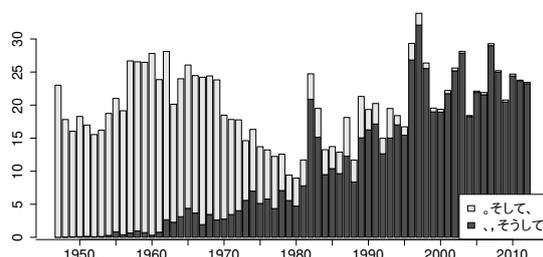


図6: 「、そして」「。そして、」

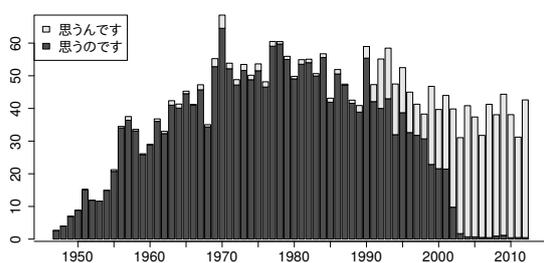


図7: 「思うのです」「思うんです」

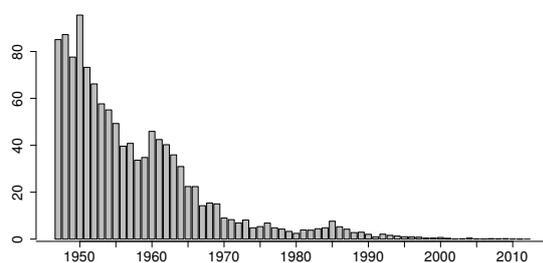


図8: 減少傾向の文字列の例:「おるのであ」

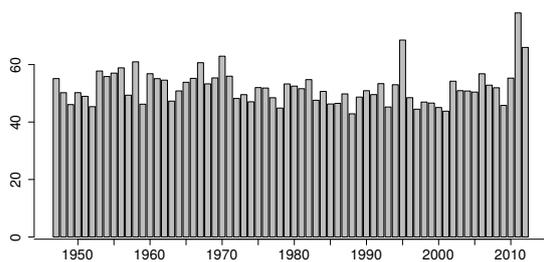


図9: 変動の少ない文字列の例:「については」

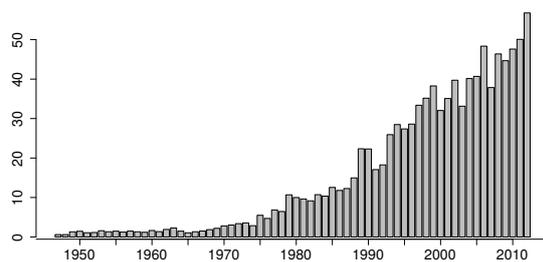


図10: 増加傾向の文字列の例:「させていた」

## 4 分析

### 4.1 分析対象の特徴

分析対象を概観し、その特徴を2点列挙する。

- (1) 会議特有の表現は、減少傾向にある。

(2) 改まった場を想定しない表現は、増加傾向にある。

まず、一つ目の特徴は、会議特有の表現が減少傾向にあるということである。この例として、表1から「であります」「おるのであ」「おるとい」「おきまして」「しましては」「いうものは」を挙げる。このうち、「であります」は、次の例のように、演説時によく見られる表現である。減少したとはいえ、表1の  $f_{tail}$  でも10万字あたりの出現頻度が126.9となっており、近年でもよく使われる表現であることがわかる。

今の物価の状況から申しまして、これはお話のように少な過ぎるという気持はいたしておるのであります。

(池田勇人, 衆議院予算委員会第12回5号, 1951-10-25)

「おるのであ」「おるとい」に含まれる「おる」は、「現代の共通語ではすっかり影を潜め、その代わりに学者、先生、社長、代議士等の権力・権威を持った男性を表す役割語の一部として機能しているようである」(金水, 2004)とされている。服部(2009)でも「～シテイル」と「～シテオル」の計量的な調査がなされており、「オル系」に代わって「イル系」がよく用いられるようになることが示されている。

日中の正常化も、それからヨーロッパの緊張緩和の進展も、いろんな事態を踏まえて、全体がそういう方向におるとい認識に立たれての御発言と思います。

(大平正芳, 衆議院予算委員会第71回3号, 1973-02-01)

「おきまして」は、ほとんどの用例が「におきまして」の文脈で用いられている。論文などの「硬い」文章で用いられる「において」の丁寧な表現であり、改まった場で用いられる。

高度経済成長時代におきましては、民間の活力が国内外の恵まれた条件のもとで活発に展開する機会を得ておった時代であると思うのであります。

(宮澤喜一, 衆議院予算委員会第91回10号, 1980-02-12)

上記の例は、「高度経済成長時代は」というように省略可能であり、硬さや改まりを表すために、意味的に冗長な表現となっている。同様の性質を「しましては」「いうものは」も持っており、次の例の場合、「政府としては」というように省略できる。

政府といたしましては、国会決議の御趣旨を踏まえながら、幅広い観点から今後の税制のあり方等につきましては慎重に検討してまいりたい、こう思っております。

(鈴木善幸, 衆議院予算委員会第94回6号, 1981-02-09)

二つ目の特徴は、改まった場を想定しない表現が増加傾向にある、ということである。表1を見れば、増加分比率の高い文字列として挙げられた分析対象表現には、一般的な日常会話でも使用することが可能な表現が多く、また、会議特有の表現が見られないことがわかる。特に顕著なのが、「んですけれ」「いるんです」「ないんです」など、「ん」を含む、くだけた表現である。これらは、本来、国会のような改まった場では使用しづらい表現だったものである。

それは、私の質問の内容なんかもそうなんですけれども、あっちだこっちだ、あっちだこっちだというので、随分振り回されたというのもありました。

(松木謙公, 衆議院予算委員会第166回10号, 2007-02-16)

ただし、例外として、「ころでござ」「させていた」「思っており」「おっしゃっ」のような敬語表現が含まれており、部分的に改まった表現が増加していることがわかる。

少なくとも、青木元秘書の判断で、幹事長に取り次ぐべき問題ではないと自分で判断して行ったという報告を受けておと ころでござ います。

(竹下登, 衆議院予算委員会第 114 回 4 号, 1989-02-18)

これから十分に調べ させていた だいて、まさに天下りを根絶するのが我々の役割でありますから、そのために全力を挙げてまいりたいと思っています。

(鳩山由紀夫, 衆議院予算委員会第 174 回 7 号, 2010-02-08)

法案を提出いたしましたならば、今国会中に、皆さんの御協力を得て成立できるように努力したいと 思っております。

(小泉純一郎, 衆議院予算委員会第 164 回 6 号, 2006-02-07)

#### 4.2 発話状況と増加分比率が高い表現との関係

前節で述べた特徴 (2) に該当する表現は 18 存在するため、増加傾向を生じさせるような、共通の要因が存在する可能性がある。そこで、2.2 節で述べた発話状況に基づいた分析を行うことにした。ただし、資料として利用した『国会会議録』パッケージには、発話状況を判別するためのマークアップがなされていないため、発話状況の手がかりとなりうる肩書の情報を利用した。

まず、基本的な情報として、肩書別発言文字数 (上位 10 位) を表 4 に示す。肩書のうち、2.2 節の発話状況のパラメータとして含まれる政府関係者と委員の発言<sup>4</sup> が全体に占める割合は、文字数で 95.5% になる。このように政府関係者と委員の割合は非常に高いので、条件が揃えば、肩書が発話状況を特定する手がかりとなりうる。

表 4: 肩書別の発言文字数

肩書	発言文字数	全体に対する割合 (%)
委員	90511105	58.4
国務大臣	35681791	23.0
内閣総理大臣	10915837	7.0
政府委員	9350421	6.0
参考人	2340948	1.5
委員長	1897103	1.2
国務大臣	1298557	0.8
政府参考人	669460	0.4
証人	600656	0.4
説明員	598851	0.4

ここでは、委員と政府関係者の発言数の比として、委員の全発言を 1 としたときの、政府関係者の発言数 (以後、「政府率」) を表現ごとに求めてみた。結果を表 3 に追記する。

表 3 の結果 (前節の四つの敬語表現を除く) を見ると、「そういった」以外の表現は、政府率が 1 以下で、また、「ん」を、くだけた表現は 0.10~0.17 と特に低いため、改まった場を想定しない表現の増加は、委員側の発言の影響が大きいことがわかる。さらに、委員が発話するのは、発話状況 2, 5 のいずれかに限定される。

前節で例外として挙げられた四つの敬語表現のうち、「ころでござい」「思っております」は政府関係者の影響が大きく、特に「ころでござい」の政府率は 8.44 と顕著に高い。蒲谷ほか (2009) の敬語の分類では、この二つの表現は共に謙譲語の一種で、改まりのニュアンスを持つ「丁重語」とされている。使用状況として考えられるのは、1 か 3 である。ただし、「ころでござい」については、「ところ

<sup>4</sup> 『国会会議録』パッケージで「政府関係者」を検索する場合、検索文字列として、肩書に「大臣」を含むもの、および、「政府委員」を指定した。「委員」の場合は、肩書が「委員」のものである。

でございます」という文脈で多用されることを考慮すると、発話状況 3、つまり、質疑における回答で用いられると考えられる。

一方、敬語表現の「させていた」「おっしゃっ」は、それぞれ政府率 0.19, 0.31 となっており、委員の影響が大きい。したがって、前者の発話状況は 2 もしくは 5、後者は相手の発言を受けたものなので、発話状況 2 だと思われる。

#### 4.3 モデルの雛形の作成

以上の分析結果のまとめとして、国会における言語表現の経年変化モデルの雛形を考えてみる。分析結果のうち、経年変化の全体的な構造として存在するのは、4.1 節で示した二つの変化である。

- (1) 会議特有の表現は、減少傾向にある。
- (2) 改まった場を想定しない表現は増加傾向にあり、特に、委員の質問(発話状況 2<sup>5</sup>)で顕著である。

この変化を引きこすメカニズムとしては、話し手が想定する聞き手の拡張を仮定する。具体的には、従来、発話状況 2 では、話し手である委員が聞き手として、議案の説明者である大臣を想定していたが、自らの質問を主権者である国民へアピールする意味も込めて、聞き手に国民を加えるようになると仮定する。その結果として、改まりが少なく、国民にもなじみやすい表現が増加するという流れである。会議特有の表現の減少についても、会議の参加者でない国民に対する説明の必要性という観点から説明できる。

このメカニズムは話者として委員を想定したものであったが、政府関係者の場合に適用しても矛盾は起きないと思われる。例えば、今回の分析で得られた例で言えば、前節でふれた丁寧語の「ころでござい」「思っており」の増加であるが、不特定多数の国民を対照とするために、改まりのニュアンスを持った謙譲語の使用を増やすということは十分に考えられることである。

## 5 おわりに

本論文では、1947 年から 2012 年の衆議院予算委員会会議録の文字 5gram を用いて、経年変化の大きな表現を抽出し、その分析結果に基づいて、発話状況を考慮した時間的変化モデルの雛形を作成した。

提案したモデルは、今のところ仮説の段階であり、今後、発話状況を考慮した検証を、データに基づいて行う予定である。また、関連研究として、井上 (1999) が「敬語の民主化」を主張している。そこでは、敬語使用における経年変化として、「身分から親疎への変化」と「敬語使用の平等化・双方向化」を挙げており、岡崎敬語調査に基づく実証的な研究(松田ほか, 2012)も進んでいる。今後は、これらの結果を踏まえた分析も行っていくつもりである。

## 謝 辞

本研究は、国立国語研究所共同研究プロジェクト「大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的な研究」、および、科研費基盤研究(B)『「昭和話し言葉コーパス」の構築による話し言葉の経年変化に関する実証的研究』の一環で行われたものである。

## 文 献

- 松田謙次郎(編)(2008a).『国会会議録を使った日本語研究』ひつじ書房.  
 服部匡(2014).『現代日本語の通時変化』pp. 21-47. 朝倉書店.  
 茂木俊伸(2008).「国会会議録における行政分野の外来語」『国会会議録を使った日本語研究』ひつじ書房 pp. 85-110.

<sup>5</sup>委員の発言は、発話状況 5 にも存在するが、意見表明という状況では、くだけた表現になりづらいと考え、現時点では、発話状況 2 と仮定している。今後調査が必要である。

- 松田謙次郎 (2008b). 「東京出身議員の発話に見る「ら抜き言葉」の変異と変化」 『国会会議録を使った日本語研究』 ひつじ書房 pp. 111-134.
- 南部智史 (2008). 「「が/の」交替における個人内変化の研究」 『国会会議録を使った日本語研究』 ひつじ書房 pp. 135-157.
- 服部匡 (2009). 「「～シテイル」と「～シテオル」-戦後の国会会議録における使用傾向調査」 計量国語学, 27:1, pp. 1-17.
- 衆議院 (2014b). 『審議の流れ』, [http://www.shugiin.go.jp/internet/itdb\\_annai.nsf/html/statics/kokkai/kokkai\\_gian.htm](http://www.shugiin.go.jp/internet/itdb_annai.nsf/html/statics/kokkai/kokkai_gian.htm). アクセス日 2017-07-21
- 参議院 (2014a). 『国会のしくみと法律ができるまで! 委員会の審査』, <http://www.sangiin.go.jp/japanese/kids/html/shikumi/iinkai.html>. アクセス日 2017-07-21
- 松田謙次郎・薄井良子・南部智史・岡田裕子 (2008). 「国会会議録はどれほど発言に忠実か?—全文の実態を探る—」 『国会会議録を使った日本語研究』 ひつじ書房 pp. 33-62.
- 金水敏 (2004). 『全国共通語「おる」の機能とその起源』 pp. 393-412. 武蔵野書院.
- 蒲谷宏・金東奎・高木美嘉 (編) (2009). 『敬語表現ハンドブック』 大修館書店.
- 井上史雄 (編) (1999). 『敬語はこわくない』 講談社.
- 松田謙次郎・阿部貴人・辻加代子・西尾純二 (2012). 「ワークショップ 岡崎圭吾調査報告—継続サンプルの分析—」 日本語学会 2012 年春季大会予稿集, pp. 37-53.